

## ヴァイキングゆかりの商都

小澤 実  
歴史家

Minoru Ozawa

バルト海からフィンランドの首都ヘルシンキとエストニアの首都タリンを両岸に見ながらフィンランド湾を奥へさかのぼると、ロシア第二の都市、サンクトペテルブルクに到着する。ソ連時代は共産主義の父レーニンに因んでレニングラードと呼ばれたこの都市は、不凍港を求めてピヨートル大帝が要塞を建設した一七〇三年を起源とする。そのサンクトペテルブルクに注ぎ込むネヴァ川をさらにさかのぼると程なくラドガ湖にたどり着く。ラドガ湖はロシア最大の淡水湖であり、広大なロシア平原への入り口でもある。そのラドガ湖の南に注ぐヴォルホフ川を南にくだるとイリメニ湖が見える。その河口に位置するのがノヴゴロドである。人口二〇万強、この地方都市の中心部に立つのが聖ソフィア教会である。この教会を建造させたのはノヴゴロド公ウラジーミルである。ウラジーミル・ヤロスラーヴィチは一〇二〇年ごろ、ノヴゴロドの支配者にして、キエフ・ルーシの首都キエフのヤロスラフ賢公の息子として生まれた。母はスウェーデンの王ウーロヴ・シエットコースングの娘イリナであつた。史料の制限ゆえに多くのことはわかつていなかが、父の後を継いでノヴゴロド公となつたウラジーミルは、フィンランドやビザンツ帝国に遠征するなど、ヴァイキングの精神を継承する君主であつた。彼は一〇五二年、

聖ソフィア教会を自らが治めるノヴゴロドに建立した。この聖堂は、父ヤロスラフ賢公が一〇三七年にキエフに建立した聖ソフィア大聖堂に比べれば、建立当時からやや落ち着いた装飾と簡素な構造であったと言われるが、それは、異民族と常に向き合う、キエフ・ルーシの北の橋頭堡であるノヴゴロドといふ都市の質実を反映したものであつたと捉えることもできる。ウラジーミル自身もここに埋葬された、と伝えられている。

### ノヴゴロドの歴史

最初に、中世ロシアで異彩を放つノヴゴロドの歴史を辿っておきたい。

広大なロシア平原に都市が成立し始めたのは八世纪である。それまでのロシア平原は、スキタイやペチネグのような遊牧民族がしばしば押し寄せ、他方で六世纪より拡大を始めたスラヴ諸族がまばらに点在する、森と川が広がるだらう広い空間であった。最初に建設された都市の一つは、ラドガ湖の南のスラヤ・ラドガである。バルト海とロシア平原のつなぎ目に位置したこの都市は、当地域の交易の中核となる重要拠点であつた。そのスタラヤ・ラドガに引き続き建設されたのがノヴゴロド（「新しい町」の意味）である。

ノヴゴロドは、西欧への入り口となるバルト海と、ビザンツ帝国・イスラーム勢力・遊牧騎馬諸族が押し寄せる黒海を結ぶルートの要衝として、中世を通じて栄えた。成立当初より、外敵から自らを守る防備施設を中心に発達した都市を治めていたのは、ノヴゴロド公と呼ばれる君主であつた。初期中世のロシアはルーシと呼ばれ、ノヴゴロドの他にも、様々なかつたのは、現在のウクライナの首都キエフである。キエフを治めるキエフ公は、遠征を繰り返し、点在する諸都市や諸部族を支配下におさめた。一〇世紀には、ロシア平原を広く支配するキエフ・ルーシと呼ばれる国家として、西欧やビザンツにも聞こえる存在となつた。しかしその後、キエフ・ルーシを統括するキエフ公の力が弱まる、と、それまでキエフ公にしたがつていた諸侯がロシア平原に割拠した。そうしたなかにあつて、ノヴゴロドは特別な位置を占めていた。とりわけバルト海への入り口に位置するノヴゴロドは、その地の利を最大限に利用して、他のルーシ諸侯、ビザンツ帝国、イスラーム諸国とのみならず、ヨーロッパ世界との関係も重視した。かくしてノヴゴロドは、ロシア平原への入り口としても、最も重要な交易地としての機能を果たすようになつた。一三世紀以降のモンゴル人によるロシア平原の支配「タタールのくびき」も、ノヴゴロドはまぬかれた。中世北ヨーロッパの商業で大きな影響力を持ち得た、北ドイツ都市を中心とした組織されたハンザは、毛皮、蜜蠟、木材などの入手を目的として、ノヴゴロドに商館を設置した。ハンザの商館は、ノ

左頁 | 1170年、スーズダリとルーシ連合軍の進撃を「しるしの聖母」の奇跡により退けた顛末を描いた板絵(137本文頁参照)。左上にノヴゴロドのクレムリン。15世紀後半 ノヴゴロド歴史建築博物館蔵

Left: A painting depicting the battle between the Novgorods and the Suzdals, and the miraculous victory attained by the icon of Our Lady of the Sign, late 15th century. Saint Nicholas Kochanov, Novgorod Museum of History, Architecture, and Art.

ヴゴロドのほかイングランドのロンドン、フランドルのブリュッヘ、ノルウェーのベルゲンにしかない。いかにハンザがノヴゴロドを重視していたかがわかる。一二世紀以降、この都市は外部から公を招聘する一方で、民会と呼ばれる組織による自治をおこなつた。民会を構成するメンバーのなかには対外交易で富と力を蓄えた大商人らがいた。君主ではなく商人が治める町、それがノヴゴロドであった。

しかしその繁栄は永遠に続くわけではなかつた。一五世紀にモンゴル支配が弱まつたのち、ロシア平原の東方ではモスクワ公国が台頭した。一五世紀後半になるとモスクワは、西欧との交易で栄えるノヴゴロドを目の敵とし、干渉を繰り返した。当時ノヴゴロドの女性市長であつたマルファは、カトリック国である西の大公ボーランド・リトアニアと手を結ぼうとした。しかしその努力虚しく、一四七八年、モスクワ大公イヴァン三世は、ノヴゴロドをその支配下に置いた。近世におけるロシア帝国の躍進の基礎が置かれる一方で、中世では珍しい共和体制を敷いていたノヴゴロドの歴史はここに終了した。

#### キリスト教とビザンツ帝国

次に、再度時間をさかのぼり、ルーシとキリスト教の話を oe おきたい。

ルーシ最古の記述史料『原初年代記』によれば、九八六年、ノヴゴロド公ウラジーミルの祖父で同名のキエフ公ウラジーミル、のちに聖公と呼ばれる人物のもとに、次々と新しい信仰への改宗を求める使節たちがやってきた。遊牧民であるヴァルガ・ブル

ガールから派遣されたイスラーム教徒、ローマ教皇から使命を受けたドイツ人司祭、ユダヤ教を国教としていたハザル汗国のユダヤ教徒、そしてビザンツから派遣された学者である。ウラジーミルは、これら四つの一神教の宗教者と対話を行い、それぞれの信仰の特徴をキエフの有力者と相談し、確認のためそれぞれの地に配下を派遣した。コンスタンティノープルに派遣された使節は、絢爛たる都市を目戻つた、とされる。

以上の挿話はあまりにも出来すぎていることもあって、『原初年代記』作者の創作である可能性が高い。しかし当時の国際情勢を考えるならば、ウラジミル聖公がギリシア正教を受容したのは理解やすい。第一に、ビザンツ皇帝バシリオス二世が内乱を鎮圧するため、キエフ・ルーシに援軍を要請した見返りとして、ウラジーミルが帝国との関係を強化しようとしたことである。ウラジーミルは、皇帝の妹アンナを妻に要請したが、帝国側は、ウラジーミルが改宗することが先だと主張した。第二に、周囲の新興諸国が、次々にキリスト教へ改宗していくことである。ブルガリア、ボーランド、ボヘミアと言つた東欧諸国も、北欧三国もすでにキリスト教に改宗し、ローマやコンスタンティノープルとの繋がりを強めつづけた。遊牧民族であるペチネグとの戦いや国内の不和に常に対応しなければならなかつたウラジーミルは、こうした周囲の状況を敏感に察知していたはずである。

シテムの一部に組み込まれたのである。

西方諸国との関係

コンスタンティノープルからのキリスト教の受容でも理解されるように、ルーシはビザンツ帝国と強固に結ばれるに至つた。しかし、このルーシの地にとって、もう一つ重要であったのは、バルト海の対岸に位置する西方諸国との関係であつた。

そもそもルーシの祖先はヴァイキングであつた。そう言いくると語弊があるが、『原初年代記』によれば、八六二年、スラヴ人たちの招きにより、リューリクと呼ばれるヴァイキングが到来しノヴゴロドを支配した、とされる。現在の研究ではリューリクの実在は疑われるものの、九世紀の後半に、多数のヴァイキングがこのルーシの地に到来し、現地スラヴ人と様々な関係を結びながら、支配者層として各地に拠点を打ち立てたことはほぼ間違いない。アイスランドでホルムガルズルと呼ばれたノヴゴロドがこうしたヴァイキングらが巨大河川が蛇のようにうねるロシア平原のあちこちに散らばつてゆくさいの橋頭堡であつたこともやはり間違いない。ルーシの拠点は程なく、黒海に近いキエフへと移つたが、その後数世紀にわたつて、ノヴゴロドとキエフを結ぶラインが、バルト海とビザンツ帝国を結ぶ最重要ル

右頁「しるしの聖母」 12世紀前半(17世紀に修復)  
テンペラ、板 58.5×52.5cm

Right: Our Lady of the Sign, the first half of 12th century,  
restored in 17th century, tempera on wood, 58.5×52.5cm

トであったことも間違いない。

ルーシは、豊かなビザンツ帝国との交易を目的としていた。九世紀には、ミクラガルズ（大きな町）と呼ばれるコンスタンティノープルに略奪に向かうばかりであったルーシは、一〇世紀に入ると、ビザンツ皇帝との間に協定を結び、正式に取引をするようになつた。『原初年代記』の作者が「ギリシア（ビザンツ帝国）とヴァリヤーギ（ヴァイキング）の道」と呼ぶルートが、バルト海とコンスタンティノープルとの間に確立した。北方から船で到来したルーシは、コンスタンティノープルで毛皮や奴隸を売り、奢侈品として好まれる帝国の絹や銀を手に入れた。ロシア平原や北欧で発見されるヴァイキングの墓地では、こうした東方の奢侈品がしばしば発見される。それらの交易を支えていたのは北欧やルーシの商

人であるが、その商人たちの安全を担保していたのは各国の君主であつた。北欧の君主もルーシの君主も、重要な交易ルートを保全するために、強い紳を必要とした。最初に確認したように、ノヴゴロド公ウラジーミルの母親イリナ、すなわちキエフ・ルーシの君主ヤロスラフ賢公の妻は、スヴェーヴ（スウェーデン）王ウーロヴ・シェットコースングの娘であつた。ことほど左様に自らもすでに国際関係を反映した婚姻を取り結んでいたヤロスラフは、「ルーシ法典」と呼ばれるルーシ統治の根幹となる法典を編纂する一方で、徹底的に娘を外交政策の道具とした。彼を継承した三人のキエフ公、すなわちイジャスラフはボーランド公ミェシュコ二世の娘と、スヴェトララフはドイツのバーベンベルク公の娘と、フセヴォロドはビザンツ皇帝コンスタンティヌス九世

の娘と結婚した。他方でヤロスラフの四人の娘は、ヴァイキング王として著名なノルウェー王ハーラルス王アンリ一世、そしておそらくイングランド王であつたエドマンド剛勇王の息子エドワードに嫁いだ。ノヴゴロドの聖ソフィア大聖堂が建設される時代のキエフ・ルーシは、極寒のロシア平原で細々と交易をしている寒村国家ではなく、ロシア平原の資源を効果的に集積し、河川と都市ネットワークを効率的に利用し、婚姻を通じて広く東西ヨーロッパと外交関係を結び、キリスト教世界と遊牧世界との間でうまく立ち回る、ヴァイキングの系譜をひくダイナミックな国家であつた。